第二章　金葉集と俊頼

第一節　金葉集撰述と俊頼の立場

金葉集ほどその撰述過程に於て複雑な勅撰集は他にない。古今集を勅撰の出発点として続く後撰集、拾遺集、後拾遺は夫々撰者達も万全を尽したと思うがいずれもみな古今集を典範として内容、形態共にその枠から一歩も

出ることは出来なかった。これが金葉集になると第一その自立的命名がまず新しい試みであった。袋草紙には「金葉」の二字は釈尊の入滅の時に金葉の花雨が降ったことから不吉であるなど言っているが、俊頼は勿論さような意味で命名したのではなく、やはり「金」は秀れた意味に、「葉」は「コトバ」と解した方がよろしく、「すぐれた和歌集」という矜持を以て俊頼みずからが命名したものであろう。歌集形態にしても従来の二十巻を十巻に

圧縮し、雑下の最後に「連歌」の部を独立させた事なども旧守を排し、革新的な試みとみることが出来る。

和歌を好み給う白河上皇御在位の時にはすでに後拾遺の撰進はあったが、院におかれてはこれとは別な新鮮な勅撰集を望まれていた。

その事を果たし得るのは俊頼をおいては他にないという叡慮もあって齢すでに七旬を迎えた天治元年(1124)俊頼は勅撰集撰進の院宣を拝命したのである。新しい勅撰集と革新歌人。

ここに白河上皇を中心に金葉集と後頼との関係が成立する。ところが、さすがの後頼にしてみても自己の家集ではなく勅撰集という性格上そこには動かしがたい伝統の世界が厳史的にも内在されていた筈であり、後頼がいざこの事に当たってみるとそこには種々な制約も感じたに違いない。例えば古い三代集歌人の處置をいかにするかという厳史性。現に初度本に於ては三代集歌人に目をつむるわけもゆかず貫之以下十九人の作者と五十首の歌

を入集せしめていることはその事を端的に物語っている。しかし俊頼のこの考え方が却って院にはお気に召さず却下されたことはむしろ白河院御自身の方が新らしかったわけで、以後二度本（これにも種々あり）から三度本へと複雑な成立経緯をたどるのだが抑々の出発点からすでに内部を孕んでいたところに金葉集の特異性がみられる。

俊頼が秀れた実作者であり、当時に歌論家であったことは院政末における大小様々な歌

合に作者として或いは判者として活躍していることにより知られるわけであるが、ひとたび勅撰集の編纂という大きな仕事となつた場合はおのずからその場は転位する。各時代の多くの歌人を如何に選定し、またその歌人のどのような作品を採用するか。次にそれらをどのように配列統一させるか。等はいわば歌人としての個人の立場とは別な一つの事業家の場になつてゆく。勿論編者俊頼という個人が中心にはなるが上には監修者としての院が

居られる。院との調和の問題もある。これらをどのように考えたらよいか。一首の詠歌に風懐を叙す歌人、一首の歌を判定する判者などの立場とは別な總合的な力を結集する勅撰集撰進者としての源俊頼という新しい企画事業家が誕生せねばならないのである。

以下金葉集撰述を囲る諸問題を考えてゆきたい。

第二節　初奏本撰進考

金葉集初奏本（初度本とも）撰進についての年次を示す文献をあげてみると、

(1)、袋草紙（上巻）に、

「金葉集、和歌六百五十四首、此外連歌十六首、但流布本是也。白河院御譲位之末、後頼朝臣一人奉院宣撰之。天治元年月日奉之、大治元年之間上奏之。此集本不定也。

奏覧之處両度返却。第三度之度以中書之草案先覧之。而件本無左右納畢。仍撰者許無此本云々。」

(2)、八雲御抄（作法部）には、

「金葉、天治元年依白河法皇倫言俊頼朝臣撰之。再三改直、大治二奏之。披露中度本也。

(3)、和歌現在書目録には、

「金葉集一部十巻。前木工頭源朝臣俊頼、依白河法皇御気色撰之。内奏之後有御気色、

三ヶ度撰改。有鹿細西三本云々。天治元年奏之。大治元二之間奏「之」。

(4)、「三奏本金葉集」（伝冨遠筆本。吉田幸一博士蔵）の奥書に、

「抑此集者白河院御譲位之未、俊頼朝臣奉院宣。天治元年奉勅。大治元二之間。此集本不定也。奏覧之處西度返給之。……」

とある。

(5)「中御門宣秀筆本金葉集」の奥書には、

「前左京大夫源朝臣俊頼依白川法皇御氣色

撰之。窓奏之後背御気色。三ヶ度撰改。有麁細両之本云々。

「天治元年奉之大治元二之間奏聞之。」

とある。

(6)「金葉和歌集」（伝兼好法師筆・吉田幸一博士蔵）

の奥書には、（歌数・作者数等を書いた奥に）

「天治二年四月日依　院宣撰之

撰者前木工頭源俊頼　校合卒」

とある。

以上の如くであり、大きな相違は(1)→(5)が

いずれも天治元年の年記であるのに(6)のみが天治二年となっている。次にはその表現が、二通りあり「撰之」とするのが、(2)(3)(5)(6)で「奉之」とするのに(1)。これに近いのが(4)の「奉勅」である。この事を考えてみるとその言い方は一様ではないが要するに天治元年に院宣を奉じたと解するのが妥当である。その意味では(4)の表現が適確である。なお、(6)にいう年記「天治二年四月」とあるのはこの写本が二度本中の精撰本である関係上のことで

初度本の院宣を奉じた年を指すのでないことはいうまでもない。

ところでこの天治元年は四月三日改元され

た。それ以前は保安五年であり、従って金葉集撰進の院宣の下ったのは四月三日以後であった。ところで初度本の成立はいつであったかについてはなかなか困難でそのきめてになるものはない。ただこれまでの先学がその傍証としてあげてきたのに「永縁奈良房歌合」開催の期日とその作者永縁の没年のことがあ

る。

というのは初度本に（秋部）永縁が「奈良の花林院の歌合によめる」として

○いかなれば秋は光のまさるらん同じ三笠の山のはの月

の一首が入集しているからである。ところがこの歌合開催の期日にも確たる証がないため永縁の没年天治二年四月五日（「興福寺別当次第」によればこの日で、これは信じてよい。）以前を歌合興行とし、併せて金葉集初度本の成立に一つの決め手を与えようとするものである。

しかるに「奈良房歌合」の開催期日を辭書類従、新校辭書類従などの記載、解説には大治三年二月五日とある。これでは永縁没後となり全く矛盾する。岡田希雄氏がこの開催日を疑ったのは理由あることである。（「三奏本金葉集（二）」（32頁―33頁）。「芸文」第十九巻第六号以下）そして同氏は大治は天治の誤りで天治二年二月五日説を出している。しかしこれとても必ずしも決定的なものではなく久曽神昇氏は「天治二年歟」（「伝宗尊親王筆歌合巻研究」附録平安時代歌合年表）と疑問の

形で言っている。

松田武夫博士は、初度本成立の手がかりを別な資料で推測されようとした。それは初度本出詠の経忠が春部では従三位経忠、夏部には左京大夫経忠と両様に書かれていることに注意されその官位表記を中心に考究されたことである。（「金葉集の研究」P.68）

即ち、経忠が従三位に叙せられたのは保安五年正月五日。さらに左京大夫に任ぜられたのは天治元年十二月廿日で（東洋文庫蔵広橋家旧蔵本・前田家蔵新写本の凡例による由）

ある由。

してみると初度本の成立は天治元年十二月廿日以後となりその下限については明確な資料がないので決定的なことはいえない。

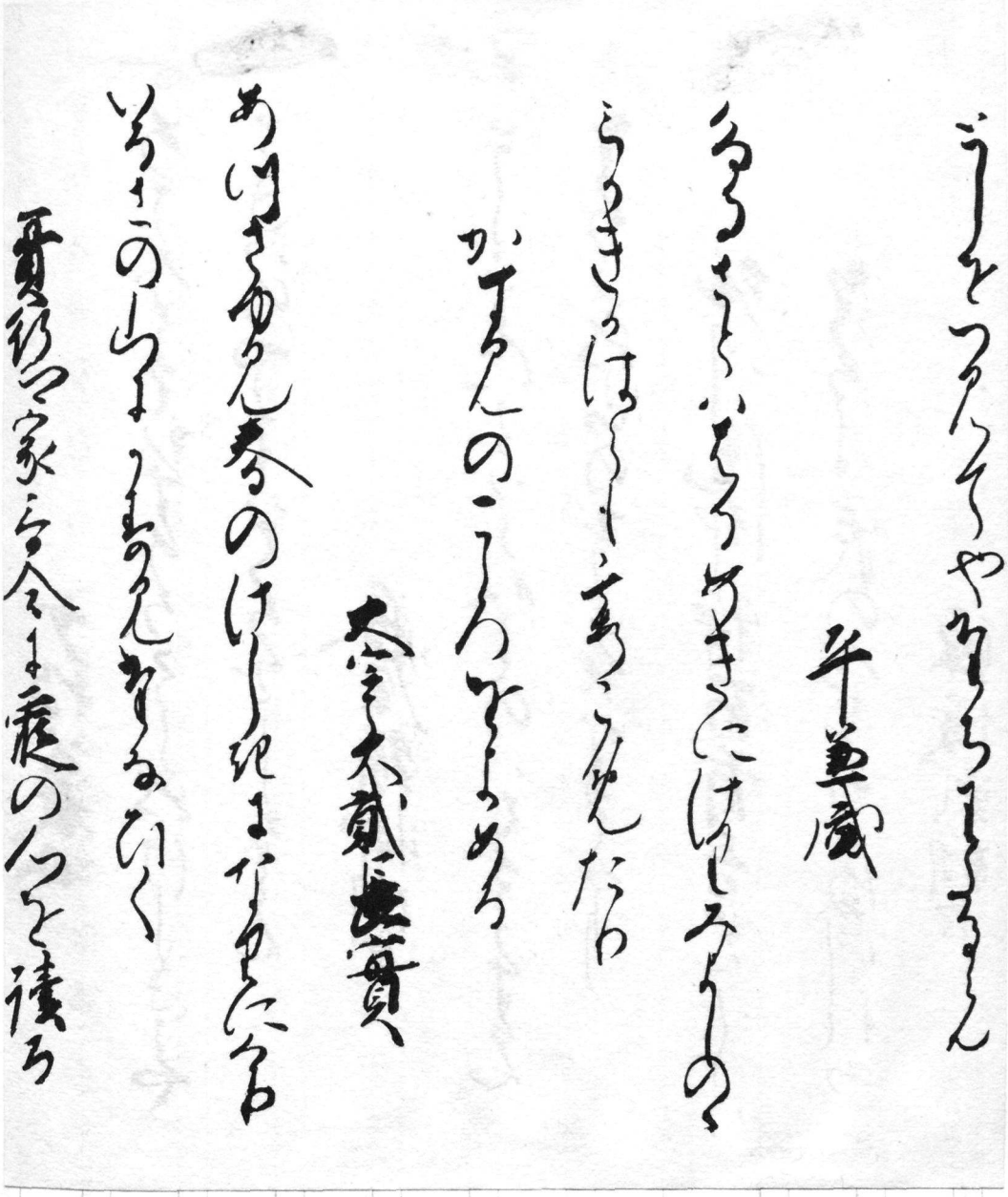
ただ参考になるのは「伝兼好法師本金葉集」の奥書が先述の通り「天治二年四月」とあるところから類推してすくなくともこれ以前には初度本は編纂されていたことと思われる。

一方先の「奈良序欠合」の開催は基俊初版本では天治元年三月下旬頃が妥当である説も出ている（桂宮叢書第十四巻橋本不美男氏解題）ぐら

いだし、後頼にしてみればこの歌合が早く開催されている程初度本の資料に取り入れるにはゆとりがあった筈である。本歌合は初度本成立の直接的きめてにはならないにしても関係は深い。おそらく経忠の左京大夫に任官した天治元年十二月廿日以後天治二年も一月中には初度本の編纂は終っていたのではあるまいか。余りこの月を下るとそれだけ却下された初度本の修正の期間も短かくなるし、同じ二度本にも種々あるところから初度本の編集

は十二月以後は急いでいると解釈するのが筆者の考え方である。急ぐといっても院宣を奉じた天治元年四月三日以降から初度本の編集にはすぐに取りかかっており、下限を出来るだけ延ばしていること（保安五年閏二月十二日の白河花見御幸の歌・經忠の署名のことなど）がその特長ではなかったかと思われる。

かくして成立したのがいわゆる「金葉集初奏本」で静嘉堂所蔵「伝為相筆金葉集」（第五巻までの零本）がこれである。（文献写真次頁に貼付）



伝為相筆本　初奏本金葉集　（二丁表）

（静嘉堂文庫蔵）

コクヨ　B4　20×20

本写本の歌数は、第一春部(139首)、第二夏部(91首)、第三秋部(147首)、第四冬部(60首)、第五賀部(31首)計468首。但し、別に後人の手になる補入の歌がある。春部の末に一首、秋部の末に二首、冬部の中に一首、末に二首、賀部の末に三首、それに続いて春部十二首、秋部十四首、冬部九首、恋部二十七首、雑部三十二首計103首がそれで流布本によって補入。また金葉集とは全く関係のない歌七首をも補入。何れも筆雑抽である。ただ巻末に一首「春日野のわ

かむらさきの我おもひつきせぬこともあはれかなニたび父にあふこともなし」の六行散らし書きは為相筆と伝えられる本文の筆蹟と同手。おそらくこの歌は巻頭の貫之の「としのうちに春立つことを春日野の[わか]なさへにも知りにけるかな」の一首に呼応するものであろう。（欠字）かく考えるとすでに上巻の末にこの歌のあることは鎌倉期の本書の書写されていた当時にその祖本にも下巻は欠本であったのではなかったかと推測される。

さて俊頼が院宣を拝し勅撰集を編集するに当たってはどういう撰歌方針と規準によったであろうか。このことについて少し考えてみたい。まず作者と作品という文学自体の問題になるのであるが、作者については金葉集時代に活躍した人達であるが特に夫々の家の縁故関係を重視した。作品については金葉集歌壇を形成する当時の歌合、百首、歌会の主だったものは必ず採用する方針をとっているようである。

また一方勅撰という性質上過去の歌人達を

無視するわけにはいかなかった。むしろこのことにはかなり腐心したようである。三代集歌人の比重を無視出来なかった伝統尊重の配慮がなされていることなどがそれである。

次に後頼の周辺を囲る主要な金葉集時代の歌人達をあげてみよう。（家の流派別に）

(一)、まず撰者後頼と父経信及び経信㊐。後頼の兄通時・経信の弟経長、経信㊐の兄に貞亮あり。

(二)、この時代の歌壇の重鎮としての六條藤家には顕季修理大夫とその子長実、顕輔、

長実母、少将公教母（顕季女）らがいる。

(三)、東宮大夫藤原公実とその子実行（八條太政大臣）、実能（興福寺左大臣）、待賢門院璋子（鳥羽天皇中宮）、実行の子公教（以上藤原公季流）

(四)、村上源氏（師房の子に左の(A)・(B)の一族あり。）

(A)堀河左大臣俊房（後拾遺集歌人）の一族。

俊房の子師頼（大納言東宮大夫）（俊頼は師頼と共に橘俊綱の養子になったことあり、特別関係が深い。）、師時（中納言）、師俊（中納言）、謹観。

(B)
六條右大臣顕房（金葉集歌人）の一族。
顕房の子雅実（久我太政大臣）・顕仲（神祇伯）・
国信（中納言）・雅兼（中納言治部卿）・雅光（
治部大輔）・覚樹（東大寺僧都）・覚雅（僧都）、及
び雅実の子雅定（中院右大臣）・顕仲の男忠季
（宮内大輔）・女子に待賢門院堀川・大夫典侍
・待賢門院兵衛、国信の子顕国（四位少将）
・信時（鄙後宇）、顕仲の孫親房等。
この(A)・(B)一族は金葉集歌人として大いに
活躍した門閥であった。なお、行宗・行

尊・頼基・定信等も同族内流である。

(五)、藤原道長門流

摂関家として最も政治的に重きをなしている門流で同時に歌壇の庇護者的存在の位置にあり金葉集時代の指導者であった。その中心に忠通（法性寺入道関白）がいる。いわゆる忠通歌壇をも形成し、俊頼と親交を持った。忠通は忠実（宇治家殿）の長子で母師子は先に述べた右大臣顕房の女という関係をもつ。

（後拾遺）　（今）　（今）　（新古今）　（金葉）

頼通 → 師実 → 師通 → 忠実 → 忠通

の直系（頼通は道長長子）は摂関家という高き門閥を誇示するものであり何れも勅撰集歌人であつた。俊頼が一時養子となつた橘俊綱は師実の弟。金葉集歌人忠教は師通の弟である。又、頼宗は頼通の弟、知房は教通（頼通の弟）の孫。その門閥はまた皇室とも姻戚関係をもつに至り、師実の女賢子（実は顕房の女）は白河院后、賢子の女泰子は鳥羽院后、師実の妹寛子は後冷泉后という風

に金葉集時代の有力な歌壇的背景を形成するのである。

(六)、小野宮流

藤原北家の中ノ野宮流(実頼)の門流の金葉集歌人には、公円・隆源・定通・顕仲・資信・有佐・道経らがいる。

(七)、藤原式家の門流には仲実がいる。

(八)、藤原氏(内麿門流)には、正家・行家の兄弟、行家の子行盛。その外有定、実光、基光らがいる。

(九)、藤原氏(長良門流)には、知信・為忠親子の外

に知綱の母・永実がいる。

(十)、藤原氏（良門内流）には、永縁とその妹前斎宮内侍、顕隆らがいる。

(十一)、藤原氏（頼宗流）には俊頼の好敵手基俊がおり、その子に皇太后別当、弟には宗通、宗通の子に伊通がいる。

(十二)、藤原氏（御子左家）には俊忠がいる。

(十三)、大中臣氏の内流には公長・安芸君がいる。

(十四)、菅原氏の内流には小大進がいる。

(十五)、清和源氏の内流に仲政・盛清がいる。

コクヨ B4 20×20

（十六）、醍醐源氏内流に俊実がいる。

（十七）、大江家門流に和漢の学才を兼ねた大江匡房がいる。

以上の人達は全歌集歌人としてその入集歌には多寡はあるがいずれも何らかの形で全歌集歌壇なるものを推進していった。俊頼は撰者としてこれらの人々の作品を検討した上で決定した。（ここでは三代集歌人にはふれない。）

ところでここで皇室関係のことについて若干述べておきたい。

勅撰集という限りにおいてその命令者たる天皇、（ここでは白河法皇であるが）は当を得た撰者を得なければならぬ。白河法皇は俊頼をその適任者と思召されたのである。俊頼が勅撰の院宣を拝したのは七十才の晩年であったが、俊頼が歌人として活躍したのはこの白河院政期であり、院は俊頼の歌人としての業績をずっと見守って来られた。在位僅か十五年。堀河、鳥羽、崇徳の三天皇の時代を通じて前後四十余年の院政を執られた。院宣は詔勅

以上の権威を持っていたのである。「二十一代才子伝」に「天皇寮性叡哲、好読書典、英才兼和漢、能詩歌……」と評されている。さらにつづき「大江匡房、源経信、藤原基俊等、甚才兼和漢、長詩歌。藤原通俊、顕季、源俊頼等、和哥才子済々焉」とある。院を中心とする宮廷文化人の競うて集まっている様は、後拾遺時代から金葉集時代にかけて文字通り絢爛豪華なる歌人輩出の機に当たっていてこの中から後頼が金葉集撰者として抜擢された

ことも故あることであつた。皇女には郁芳門院媞子がおられ、これに仕えたのに安芸がいるし、白河院の養女璋子に仕えたのには待賢門院安芸（安芸と称した女房は他にもいる）がいるという。

風に女流女房歌人も多士済々である。

堀河天皇も和歌を好まれ俊頼との関係は深い。「堀河院艶書合」・「堀河百首」などはその中でも特に有名。いわゆる堀河歌壇が形成された一時期を現出した。まだ俊頼の左京権大夫時代の壮年期であつた。この期には周

防内侍、皇后宮摂津、肥後、紀伊、百合花などの女流歌人が活躍している。

鳥羽天皇が嘉承二年七月十九日に齢僅か五才で即位されたのは後頼五十三才。木工頭になって三年目。天皇は金葉集に僅か一首をとどめられているが、特に笙竹を好み笛を美くした。今鏡には「御笛をえならず吹かせ給ひて、堀河の院にも劣らずやおはしましけむ」と語っている。

崇徳天皇が保安四年正月廿八日に齢五才で

即位された時俊頼はすでに六十九才の晩年を迎えていた。「天皇自幼及長、甚好和歌」とは同じく二十一代集才子伝の伝えるところであり、天養元年に顕輔に「詞花集」撰進の宣旨を下している。時代から言えば次の期になるが俊頼が金葉集拝命の天治元年は白河院宣とはいえこの崇徳天皇の時代であり俊頼の仕えた最後の帝であった。その意味で俊頼も忘れがたい思いであったにちがいない。後冷泉天皇の御代に生れた俊頼が崇徳天皇まで六代に仕え

七十五才の生涯を終るまで、とりわけ親任厚かった白河院の崩御が奇しくも俊頼と同じ没年の大治四年であったことも浅からぬ因縁であった。白河院御弟輔仁親王は三宮の名で金葉集に九首入集。その男左相丞源有仁も同じく九首を残している。

以上皇室と俊頼との関係につき金葉集を中心に考えてきたのであるが、上は皇室を初め摂関家、大臣、納言、僧侶、殿上人、女流などその階層はさまざまで俊頼はこれまで述べ

て来たような人々を決定し、左にみる様な歌合などから歌の出典を求めた。初度本五巻にみえる歌合の名をあげると次の通り。（典範となるべき歌合は古くても之を考慮に入れている。）

(一)、平安時代前期歌合

1	亭子院歌合（延喜十三年三月十三日）
2	天徳四年内裏歌合（三月三十日）
3	天徳四年麗景殿女御歌合
4	河原院歌合（応和二年九月五日）
5	法成寺大政大臣家歌合

(二)、平安時代中期歌合

コクヨ B4 20×20

6 花山院歌合（寛治元年八月十日）

7 賀陽院水閣歌合（長元八年五月十六日）

8 弘徽殿女御歌合（長久二年二月）

9 忠義公家歌合

10 永承四年内裏歌合（十一月九日）

11 永承四年殿上根合

12 橘俊綱朝臣歌合（永承五年十一月）

13 道雅卿家歌合

14 皇后宮春秋歌合（天喜四年四月三十日）2才

15 後冷泉院御時歌合

16 後冷泉院御時殿上歌合

17 後冷泉院御時殿上歌合

18 承暦二年内裏歌合 24才

(三)、平安時代後期歌合

19 四條宮扇合（寛治三年八月廿三日）35才

20 従二位親子家造紙合（寛治五年十月）37才

27 実行卿家歌合（元永元年六月廿九日）64才

28 長実卿家歌合（保永二年閏五月十三日）67才

21. 郁芳門院根合（寛治七年五月五日）39才

22 宇治前太政大臣 師実家歌合（仝八年八月十五日）40才

23 鳥羽殿前栽合（嘉保二年八月廿八日）41才

24 俊忠卿家歌合（長治元年五月廿六日）50才

25 実行卿家歌合（永久四年六月四日）62才

26 雅定卿歌合（天永元年五月）64才

29 題隆朝臣家歌合 ?

30 李良花林院歌合（天治元年三月下旬か）70才

（巻六以下は八代集抄本による）

31 国信卿家歌合（康和二年四月廿八日）46才

32 堀河院艶書合（康和四年閏五月二日・七日）48才

33 雲居寺歌合（永久四年八月）62才

34 比叡山歌合（本文欠如のため明？天仁二年か天永二年か不明）

（参考のため関係歌合には俊頼の年令を朱書きをして示した）

以上の歌合の歌をその出典としているのであるが、この伝為相筆本は鎌倉期を下らない写本であるにもかかわらず多くの欠陥がある。

コクヨ B4 20×20

その主なものをあげると次の通り。

(1) 作者の誤謬

○けふ暮れぬあすも来てみん桜花心して吹け春の山かぜ（春部）

の作者を源俊頼朝臣とあるのは源師俊朝臣の誤りである。

○みなかみに花や散るらん山川の井ぐひにいとゞかゝるしら波（冬）

の作者を大納言公任とし右傍に「経信イ」と校異あり、経信の方が正しい。

○衣でにひるは散りつむ桜花よるは心にから
るなりけり　（仝）

の作者を経源法師としているが、これは隆
源法師が正しい。

○山里のそともの田の苗代にいはまも水を
せかぬ日でなき　（仝）

の作者を藤原経資としているのは藤原隆資
の誤り。

○入日さす夕くれなゐに色はえて山下照らす
いはつゝじかな　（仝）

の作者を摂政左大臣とし、「家参河イ」とある。

これは参河が正しい。

○むらさきの色のゆかりに藤の花かゝれる枩もむつまじきかな（仝）

の作者を藤原顕頼朝臣とし「輔イ」とある

のは顕輔が正しい。

○稲荷山たづねや見ましほとゝぎす待つにしるしのなきかとおもへ（夏部）

の作者を大中臣公実とあるは中納言実行の誤り。

○山のはを玉江の水にうつしもて月をも波の下に待つかな（仝）

の作者を中納言顕隆とするのは源俊頼の誤りである。

○たなばたにかせる衣の露けきに飽かぬけしきを空に知るかな（秋部）

の作者を中納言国能としているのは国信の誤りである。

○もずのゐるはじの立ち枝のうすもみじたれわが園のものとみるらん（仝）

の作者を藤原仲家朝臣とし「実イ」とあるのは仲実が正しい。

○谷川の水はまさりてしぐれにはもみぢの色ぞ深くなりける（冬部）

の作者を藤原為忠とあるのは永縁の誤りで詞書も失している。以上十一個所。

(2) 脱落

○「うぐひすの鳴くにつけて中……」（春部・題季）

の詞書脱落。

○「おほ井川散るもみぢばに埋もれて……」（秋部

・公長）の詞書。

○「たつた河しがらみかけて……」の作者「後頼」の名。

○「住よしの岸のかたそぎ……」（冬部）の詞書。

○思ふとも冬の夜すがらねはながし［　　］（欠）そで

のつらいとけせぬ（仝）（題読人不知とある。）

以上五個所。

(3) 作者表記の不備

初奏事の作者表記にはかなり不備な点あり

不統一。勅撰集の慣例としては例えば「源後頼朝臣」の如く姓名・朝臣と表記するのがたてま

えであるが（官に応じて）時には只単に「源俊頼」とのみある個所がある。この朝臣を欠いでいるのをみると、この外にも大中臣能宣・藤原成通・大中臣公長の例をみる。また顕輔朝臣の如く藤原（姓）を欠いだ場合もあり、紀貫之を只「貫之」としたのも誤りである。また藤原行家朝臣の如く略式に記しているのも誤り。普通なら左京大夫経忠と書くべき所を従三位経忠と記すのも異例である。天治元年以前に三位の位を得ているのに「顕仲朝臣母」とか「長実

××

朝臣母」と記しているのは当然卿とあるのが正しい。

以上の如くいずれもこれらの誤謬、脱落、不統一などはその書写の時に起つたものであろう。後頼自身の歌を他作とするなど撰者後頼のなしたわざとは到底考えられないからである。しかし又一方初度本の歌の本文の中には二度本、三奏本などと異なるものもあり後頼自身が主観的に修正したあともみられる。

初度本と二度本とは異なるが三奏本になつ

て再び初度本に復帰した例などもあり、詞書
についても後頼自身の加除、訂正などとおぼ
しき跡もみえるなど、初度本は少ずしも整備
されていない面も多いが素朴な形に於て後頼
の撰進の態度がそのまま窺える所に特色があ
ると言える。

ところで「今鏡」（御子たち第八）に次の様な
記事がある。（本文は「日本古典全書本」による）

「東宮実仁（すけひと）と同じ腹に、第三の御子おはしき。
輔仁（みこ）の親王と申しき。延久五年正月に生

まれ給へり。（中略）歌詠み給ふこともすぐれ給へりき。かやうの御歌ども（注・「植え置きし君なき宿に」の歌）本工の頭俊頼の撰びて奉れる集に、輔仁（すけひと）の親王（みこ）と書きたりければ、白河院は、『いかにこゝに見む程、かくは書きたるぞ』と仰せられければ、三の宮とぞ書き奉れる。御中らひは、善くしおはしまざりしかども、御弟なればなるべし。……」

これによると金葉集に初め「輔仁のみこ」という名を書いたため白河院から注意されて三の宮

と書きかえて奉ったというのである。このことは「増鏡」（おどろのした）にも見えている。

さすれば初度本にも「輔仁のみこ」と書いた一本がすでであったことになる。ところが静嘉堂本には「三宮」とあり、「輔仁の親王」と書いた伝本は他にもない。松田直兄刊行の版本三奏本の奥書には「初度進覧本一番三宮御歌也。

○としの中に春たちくればひととせにふたたびまたるうぐひすの声

とある。しかし現在初度本の巻頭歌（静嘉堂

本）は貫之の「としのうちに春立つことを春日野の[わか]なさへにも知りにけるかな」である。

こういうことで三宮巻頭歌の初度本の方が真の初度本の形であったろう。三宮の歌は同じく立春の歌で巻頭を飾る歌としてふさわしくしかも当代の歌人であった理由で後頼のまず心にとめた歌であったと思われる。しかし輔仁は白河院の異母弟であり少ずしもその仲はよくなかったらしくその上輔仁という諱を読したのが御気に召されず三宮（後三條院第

三皇子。母は源基子）にかえさせたのである。こうしたことから結局この歌は削除される運命にあったのであろう。そして今見る静嘉堂蔵「伝為相筆本金葉集」の如き初度本の編集になったものである。金葉集撰述経過について「今鏡」（村上の源氏第七「武蔵野の草」）には、

「後頼の君、金葉集撰びて奉りたりける始めに、貫之『春立つ事を春日野の』といふ歌、その次に覚雅法師として入り給へりけるを、『貫之もめでたしといひながら、三代集に漏れ

きて、あまり古びたる。覚雅法師も、げにと
もつぶき覚えず「など仰せられければ、古き
上手ども入るまじかりけり。またいとし
もなく思し召す人除くべかりけりとて、御
覚えの人をのみ採り入れて、次の度奉りけ
れば、「これもげにとも覚えず」と仰せられけ
れば、また作り直して、源重之、初めに入れた
るをぞとどめさせ給ひけるは、隠れて世
にも弘まらで、中度のが世には散れるな
るべし。」（「日本古典全書」本による）

と記している。これは初度本のみでなく三奏本に至るまでの経過をもよく述べた文である。静嘉堂本における三代集歌人とその入集歌を示すと次の通り。

(一)、古今集歌人（六人・十九首）

貫之（13首）・躬恒（2首）・是則（1首）・伊勢（1首）・忠峯（1首）・（深養父）1首

(二)、後撰集歌人（二人・五首）

朝忠（3首）・中務（3首）

(三)、拾遺集歌人（十二人・三十一首）

能宣（4首）・兼盛（4首）・好忠（6首）
順（1首）・好忠（6首）・忠見（1首）・望城
（1首）・相方（1首）・赤染（2首）・重之（3首）・
馬内侍（1首）・道綱（1首）

（計　二十人・五十六首）

後頼が三代集歌人二十人と五十五首を入集
せしめたことはかなりその比重は大きい。

白河院の却下された理由は古い三代集歌人
の歌が多いところにあったわけである。

次に初奏本に於て五首以上入撰した主要歌

人の一覧表を作ると左の如くなる。

歌人＼巻別と歌数	経信	俊頼	公実	顕季	長実	顕輔	忠通
春部	4	7	4	5	7	6	3
夏部	4	6	4	2	1	1	3
秋部	10	4	6	5	3	2	2
冬部	4	3	2	2	0	0	0
賀部	1	0	0	0	1	0	0
計	23	20	16	14	12	9	8

白河院	有仁	匡房	雅兼
2	3	2	5
2	2	1	0
1	0	0	1
0	1	2	0
0	0	1	0
5	6	6	6

この表によつて明らかなように初奏本に於て俊頼は文経信の歌を最も多くとり自分自身を第二位。第三位は公実、以下表の順位になり白河院は比較的少ない。これらの作者は三奏本まで概ね主要歌人の座を占めている。

この中初奏本における後頼自撰の二十首は次の通り。

(1)いつしかとけさは氷もとけにけりいかでみぎはに春を知るらん（春部）（初奏本のみ）

(2)渡たてる松のしづ枝をくもでにてかすみ渡れるあまの橋立（仝）（初奏本のみ）

(3)春さめに降りしむれども鶯の声はしほれぬものにざりける（仝）（流布本にも）

(4)藻がり舟ほつゝしめなわ心せよ川ぞひやなぎ岸になみよる（仝）（初奏本のみ）

(5)
山桜咲きそめしより久方の雲井に見ゆるたきのしら糸

（仝）（流布本にもあり）

(6)
木ずゑには吹くとも見えでさくら花かをるぞ風のしるしなりける（仝）（　仝　）

(7)
かへる春うづきのいみにさしこめてしばし見あれのほどにても見む（仝）（仝）

(8)
待ちかねてたづねざりせば郭公たれとか山のかひに鳴かまし

（夏部）（仝　）

(9)
ほとゝぎす待つよのかずはかさなれど声はつもらぬものにざりける（夏部）（初春本のみ）

(10)
さみだれはふるからおのゝ忘れ水おしひたすらの沼とこそ見れ（仝）（仝）

(11)
風吹けばはすのうきばに玉越えて涼しくなりぬひぐらしの声（仝）（流布本にも）

(12)
この里も夕立ちしけり淺茅生につゆのすがらぬ草の葉もなし（仝）（仝）

(13)
山のはを玉江の水にうつしもて月をも波の下に待つかな（仝）（初度本のみ）

(14)
澄みのぼる心や空に松ふらん雲のちりゐぬ秋の夜の月（秋部）（流布本にも）

(15)
山のはに雲の衣をぬぎすてゝひとりも月の立ちのぼるかな

（全）（全）

(16)
さを鹿の鳴くねは野べに聞ゆれどなみだはとこのものにぞありける

（全）（初巻本のみ）

(17)
うづら鳴く真野の入江の浜風に尾花なみよる秋の夕暮

（全）（流布本にも）

(18)
たつた河しがらみかけて神なびのみむろの山のもみぢをぞ見る

（冬部）（全）

(19)
はしたかをとりかふ沢にかげ見れば我身もともにとやがへりせり

（全）（全）

(20) 住よしの岸のかたそぎ行きも会はで霜置き
まよふ冬は来にけり（今）（初表本のみ）

第三節　二度本撰進考

初表本は白河院にお気に召さず却下されたので後頼は編集を改め二度本の撰述にとりかからねばならなかった。一口に二度本と云っても諸本ありかなり相違している。このことについては以下考えてゆきたいが、まず白河

院の御不満にこたえて鏡意これが修訂に当った後類の最初に撰述したのがいわゆる続類従本の初度本であり、真の二度本といわれるものではなくその過渡的位置にあるもので脱略が多い。即ち天治二年、二度本の精撰本（伝兼好法師本の如き本）の完成までには二度本自体にも種々伝本を生じた。この二度本系統の写本については松田武夫博士がすでにその数員数の異同を中心に諸本を三種類に分類され委細に調査されている。（「勅撰和歌集の研

究」及び「金葉集の研究」など）ここではそれらについては扱れない。多くの諸本の中に博士の取りあげていない「伝中御門宣秀筆本」、「飛鳥井雅春本」（両書とも九州大学所蔵）などを中心にその他の二度本との関係などを併せて考えてみたい。

（一）伝中御門宣秀筆本金葉和歌集

（九州大学附属図書館蔵）

本写本について述べる前に順序として関係のある類従本のことについて述べる必要がある。類従本金葉和歌集の奥書に次のような識語がある。

「此和歌集者中御門宣胤卿息黄門宣秀手跡也。奥書等珍重本也。歌数聊多世流布本。可紛逐底而已。

慶長十四年季秋上澣　光広花押」

とある。光広は烏丸氏。細川幽斎門下の高足。正二位権大納言にまで至り、幽斎から古今伝

授を受けた歌人。（天正七1579｜寛永十五1638・60才没）この光広が慶長十四年秋（1609）に中御門宣秀筆の金葉集をみて他の流布本より歌の多いことに注意したことは大きな意義がある。宣秀の父中御門宣胤は「万葉類葉抄」十八巻を撰進したほどの学者であった。宣秀も中御門の学統を継承した学者で金葉集なども中御門家に伝流していたのを書写したものではないかと推測される。

又別に光広には「伝烏丸光広筆本」なる一本あり、（内藤久寛氏所蔵）

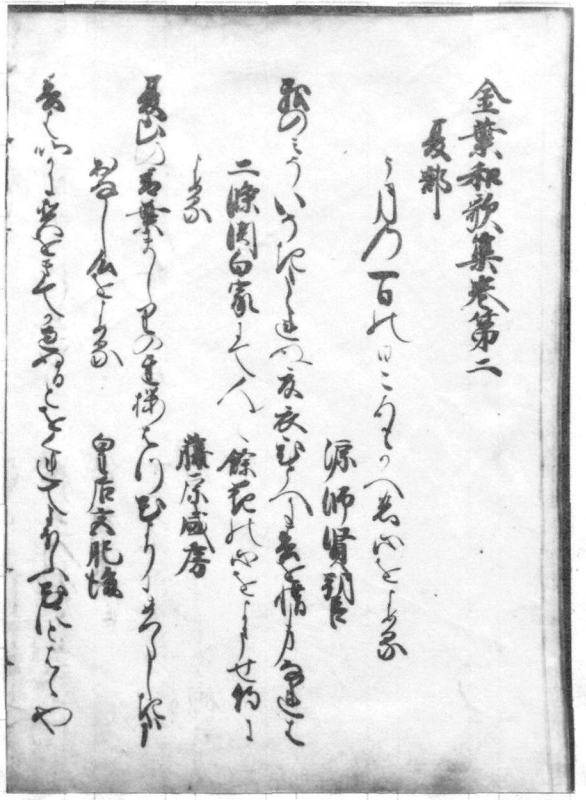
を残している。

さて、宣秀筆本の出現は長く学界の待望しているところであったが、その写本が九州大学に所蔵されているのである。本書は宇土侯細川家旧蔵本中の一冊であったのが九大に購入されたものである。このことについて若干述べておきたい。

(1)、書誌的考察

本書は胡蝶装の一冊本。縦24.2cm、横16.9cm。墨付115葉。白紙が前に一葉。表紙は紗に金糸でま、

んじくづしに桃の実の模様を配し、用紙は鳥の子。内題はなく二葉目の裏から本文が始まる。第一行目に「金葉和歌集巻第一」とある。一丁十行書き。歌は巻末の余白ある部には二行の場合もあるが他は凡て一首一行書きである。

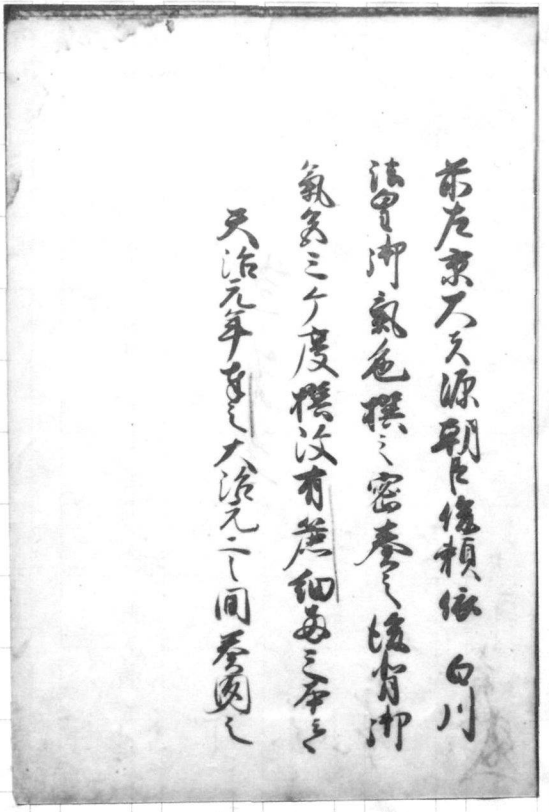


（第二巻頭）
（其の一）

本筆秀宣

（写真 其の一）

奥書には「前左京大夫源朝臣俊頼依　白川
法皇御気色撰之。　密奏之後背御気色。　三ヶ度撰
改。　有簾（ママ）細西之本云々
天治元年奉之大治元二之間奏聞之」とある。


前左京大夫源朝臣俊頼依　白川
法皇御気色撰之密奏之後背御
気色三ヶ度撰改有簾細西之本云々
天治元年奉之大治元二之間奏聞之

（奥書）（其の二）

宣秀筆本

これは本文と同じく宣秀筆である。

（写真其の二）

（簾は鹿の誤りだろう。）

コクヨ　B4　20×20

その後に「此和歌集者中御門宣胤卿息……」と類従本と同じ識語あり、これはその書体、花押からして烏丸光広筆と信じてよい。本集を納めているのは桐箱。その上部中央に「金葉中御門宣秀筆」と墨書。蓋の裏には次の二葉の極札が貼付。

○金葉集　中御門亜槐宣秀卿　奥書烏丸亜槐光広卿　印

○中御門殿宣秀卿　金葉和歌集一冊　奥書烏丸殿光広卿有名判　印

極札の印には「牛庵」「琴山」とある。

○右牛庵了珉極札　赤島アハセふくさ上包

○紙数百拾六枚内白紙一枚秤目七拾五匁

○箱ノ書付瀧本坊法師昭乗筆

右のうち「赤島アハセふくさ上包」は紛失したものか、無い。さらに箱の底には、紙を貼り、

『此金葉集初度奏覧の本と存上候。校本』にも合不申三度之本とも相違仕、世間比類無之候上鳥丸光広卿奥書珍重御座候。

弘賢』

という識語が六行に書かれている。（」は改行を示す。）

筆蹟署名などから屋代弘賢と推定される。

弘賢（幕臣・宝暦八（1758）―天保十二（1841）84才没・塙保己一の門下）はこの宣秀本をみて初奏本たることを明らかに光広の奥書も珍重という本文の性格を認定したものである。

松田博士は続類従本の脱落個所を(一)伝烏丸光広筆本、(二)仝博士架蔵園林文庫旧蔵本、(三)仝架蔵押小路旧蔵本、(四)公夏本、(五)岡田本等で補正されている。この中最も古いのは(四)で、(一)は光広が宣秀本の奥書を加えた際、慶長年間に写したものであろう。従って宣秀本系統ということ

になる。

ところで井上通泰博士がすでに説かれた通り、「校訂金葉集」類従本に多くの脱落のあるのは、類従本の編者は宣秀卿書写の本でない他の伝本によったもので脱漏は伝写の際に生じたものと推論されたのは首肯してよい。

このうち、「伝公夏卿筆本」（正宗敦夫氏旧蔵本）は室町後期の写本で独自性をもつ。岡田本は江戸中期の書写本。同じ祖本の宣秀本系統本でも他本の校異などあるのは絶度の乏しくなってきていることを示すものである。

(2) 宣秀本と類従本との比較

類従本にはかなり多くの脱落などあり、それらはすべて宣秀本によって補充することが出来る。そのうちまず歌の脱落個所からみてゆこう。

(A) 歌の脱落

類従本には相当数の歌の脱落があるが、そのうち本写本によって補充出来るのは三十五首ある。その個所を示すと次の通り。（内、連歌八句を含む）

(1) 第二「夏部」の最後に類従本では「次下闕」とある。これは四首欠。今宣秀によって補充する。その歌は次の通り。(28丁裏にあり)

○夏の夜の月待ほどの手すさみに岩もる清水いく結しつ(藤原基俊)

○みそぎする河せに立てるゐくゐさへすりぬきかけてみゆるけふかな(源有政)

○みそぎする汀に風の涼しきはひと夜をこめて秋やきぬらむ(中納言顕隆)

○今日くれば あさのたちえにゆふかけて夏みな月のみそぎをぞする（藤原季通）

（光広筆本・園林文庫本・公夏筆本・岡田真之本・押小路家旧蔵本も宣秀本と全じ）（以下光・園・押と略称す）（公・園）

(2) 第三「秋部」の巻頭（三首欠）

○とことはに吹夕暮の風なれば秋立日こそ涼しかりけれ（春宮大夫公実）

○まくずはふあだのおほの〻白露をふきなはらひそ秋の初かぜ（太宰大貳長実）

○ふぢばかまはやほころびてにほはなむ秋の

はつかぜ吹たゝずとも（皇后宮美濃）

（この三首同じく光・園・押・公・園にもあり）

(3) 仝「秋部」の「稲葉ふく風の音せぬ…」の次（七首欠）

○山ふかみ問人もなき宿なれどそともの小田に秋は来にけり（藤原行盛）

○夕されば門田のいなば音伝てあしのまろ屋に秋風ぞ吹（大納言経信）

○山のはにあかでいりぬる夕月夜いつ有明にならむとすらん（大江公資朝臣）

○風吹けば枝やすからぬ木の間よりほのめく

秋の夕月夜かな

（藤原　忠隆）

○月かげのすみわたる哉天のはら雲吹はらふよはのあらしに

（大納言経信）

○草枕この旅ねにぞ思しる月よりほかの友なかりけり

（法橋　忠命）

○もろともに草葉の露のおきゐずばひとりやみまし秋の夜の月

（顕仲卿女）

○（この七首同じく光・園・押・公・閑にもあり。）

(4) 今「秋部」の「長経のかつらの山庄にて閑見月といへることを」大納言経信とあり、

その次の経信の歌以下八首欠く。

○こよひわがかつらの里に月をみて思のこせることのなきかな

○たびねするなにはの浦のとまやかたもろともにしもやどる月かな（藤原有業）

○くもりなき影をとどめば山のはに入とも月をおしまざらまし（春宮大夫公実）

○てる月の光さえ行苔なれば秋の水にもつらゐにけり（皇后宮摂津）

○山のはに雲の衣をぬぎすてゝひとりも月のすみのぼるかな

（源俊頼朝臣）

○あしねはひかつみもしげきぬま水にわりなくやどる夜はの月かな（摂政左大臣）

○鏡山峯よりいづる月なればくもる夜もなき影をみるかな

（一宮紀伊）

○いにしへのなにはのことを思出てたかつの宮に月のすむらん（参議師頼）

（この八首同じく光・圓・押・公・図各本にもあり。）

(5)

第八「悪部下」の「よとともに袖のかはかぬ……」の次に七首の歌を欠く。

○あふことのこよひと思はばタつくひいる山のはもうれしからまし（中納言雅定）

○山の井の岩もる水にかげみればあさましげにも成にけるかな（右兵衛督伊通）

○みちのくの思ひしのぶに有ながら心にかゝるあふの松原（太宰大貳長実）

○おもは人にたのめし人の昔にもあらずなるとのうらめしき哉（権僧正永縁）

○くるゝまもさだめなき世に逢事をいへども
しらで恋わたるかな（隆源法師）

○人心あさ沢水のねぜりこそこるばかりにも
つまゝほしけれ（前中宮越後）

○わぎもこがこえたちきゝしから衣そのよの
霧に袖はぬれにき（修理大夫顕季）

（この七首同じく光・園・押・岡各本にもあり）

(6) 今「悲部下」の「もらさばや細谷川の……」の次
に二首の歌を欠く。

○君こそは一夜めぐりの神ときけなにあふこ

とのかたゝがふらん（よみ人しらず）

○あづさゆみはへる朝の思ひにはひきくらぶべきことのなきかな（藤原顕輔朝臣）

（この二首同じく光・園・押・岡各本にもあり）

(7) 第十「雑部下」（連歌）「かさゝぎならばかゝらましやは」（あるものゝ）の次に八句（四聯）を欠く。（宣秀本の本文と異同があるので校異を示した。）

詞書（みのむしの梅の花のさきたる枝にあるをみて）（光・園・押・岡・公にあり）

（各本）

○ むめのはながさきたるみのむし（律師慶暹）

詞書（まへなるわらはのつぶけゝる）（光・園・押・岡・公各本にあり）

雨よりは風吹くなとやおもふらむ（まへなるわらは）

○よるをとすなり滝の白糸
くりかへしひるもわくとはみゆれども
（よみ人しらず）

（う）（光・園・押・岡・公 各本）

○あらふとみればくろきとりかな（頼算法師）
さもこそはすみのえならめ夜と共に（よみ人しらず）

○奥なるをもやはしらとはいふ（なりみつ 成光）
見わたせばうちにもとをばたてゝけり（観暹法師）

但しこの連歌の部において宣秀本と他本とで異る個所がある。

（一）詞書において先の朱筆を以て記入した部分は宣秀本にはない。

（二）本文の「あらふ」は他本では「あらう」となつて

いる。

(8) 金葉集最尾に「なくそぢにみちぬる潮の濱びさし久しく世々にむもれぬるかな」の（世にも）流布本

一首は類従本にもあるが、その詞書の

「七十になるまでのぞむつかさなどもかなかやきことなどもなく

なはでよろづにあやしきことなど思ひつづけてよめる、みなもとのとしより」が欠けてい（げきつ）る。これは宝秀本にも、他の二度本初（また）

期と思われる光広・園林・押小路・岡田・公夏の五本にもある。但しこれら五本

と宣秀本との間には本文に相違がある。

（朱筆は五本の本文を示す）

さて、伝宣秀本には異本との校合の書入がある。しかし、この異本がいかなる性質の本であかについてはいまだ不明。その他訂正（みせけちにして右に正しい文字を記す）、脱落文字の補入、作者名に小字で註を施したもの、片仮名でよみ仮名を付したもの等がある。

次にこれらの個所が類従本ではどのように取扱われているか。両書の比較を調査してみ

ると次のようになる。

伝宣秀筆本	○校異書入	16
	○訂正	20
続類従本	○そのまま書写した所	14
	○誤写したもの	1
	○傍注として記したもの	1
	○訂正した本文採用	14
	○訂正しない本文採用	3
	○誤った本文となったもの	1
	○脱落歌の中にあるもの	1
	○異本との校異として	1

○補入 11	○補入した本文採用 11
○作者名の註 4	○そのままの書写 3
	○脱落欄の中にあるもの 1
○読み仮名 1	○そのままの書写 1

以上「伝宣秀筆」にみられる校異、訂正、補入、作者名の註、読み仮名など五十二項が続類従本に於てはどのようになっているかを調査してみた結果をまとめて表示した。

左のうち注意すべきものをあげると、

(一) 校異書入が傍注となっているもの。

宣秀本	類従本
○朝ごとに（秋イ）	○朝ごとに（秋部）（秋歟）

(二) 訂正が異本との校異と記しているもの。

宣秀本	類従本
○浪かけて（よ）	○浪かけて（よイ）（秋部）

(三) 訂正が誤った本文になったもの。

宣秀本	類従本
○佛にきやう（く）	○佛くきやう（雑部下）

(四) 読み仮名。

○千里（チリ）のうたがひ	○宣秀本に同じ

なお、この外両書の校異を検すると百全の個所が指摘出来る。しかし以上見て来た通り類従本にあって宣秀本にない個所は一つもない。

また宣秀本の誤謬もそのまゝ書写している場合もあり、類従本は宣秀本を祖本として出来得る限りこれに忠実たらんと試みている。

しかし、百全の校異のあるのは何を物語るものであろうか。これはおそらく類従本は直接宣秀本をみたのではあるまい。すでに井上通泰博士の指摘の如く宣秀本でない伝本を以

て書写していると推測される。多くの脱漏はその書写の際生じたもので、ある個所は流布本によったと思われる。類従本に数多の脱漏のあることと（「……歟」とあるもの）もそれを物語るものである。また宣秀本そのものにある校合書入れも本文と同筆であり光広が奥書を加える以前から存していたものと思われる。そして杉田武夫博士所蔵の園林文庫本（その他これと同じ初期の伝本。但し久夏本はやや異る）とも宣秀本は異っている。しかし類従本の欠

陷はこの宣秀本によってすべて補充することの出来るのは祖本たる性質を有する宣秀本の善本であることを証するものである。

宣秀本と同じ初期の伝本光広本、園林文庫旧蔵本、押小路家旧蔵本、公夏卿本、岡田本相互の本文研究についてはすでに松田博士の精緻な考察があるのでここでは省略し、宣秀本と類従本との関係を中心に述べてきた。

但し、ここで問題として残るのは「宣秀本」と「光広本」との関係のことである。という

のは類従本に「此和歌集者中御門宣胤卿息黄門宣秀手跡也……」という光広の奥書があり、仝時に一方「伝烏丸光広筆本」という慶長頃の書写本がある。この光広本と宣秀本との関係についてここで一応考えておく必要がある。すでに井上通泰博士が「思ふに此本は光広が宣秀卿書写の本に奥を加へし時写しとどめたるならむ。……」と言われ、松田博士もこの事にふれ「この本を光広自筆とすれば宣秀自筆本を写したものと想像される可能性を有する

われである。かかる意味に於て、宣秀本が出ない限り、この本はこの種の類本中比較的伝写の系統がはっきりする古写本なる点で、学的価値のあるものである。……」（「勅撰和歌集の研究」229頁）と指摘された。

ところで現在「伝宣秀筆本」が発見されたということは極めて学的に意義あることである。そこで宣秀本と光広本との比較が可能になったのでこのことについて次に述べておく。

(二) 光広本と宣秀本との比較

まず、光広本の本文には次の十三首一句(連歌)が欠脱している。それをあげると次の通り。

(一) 第一春部

○春ふかみ神なび河にかげ見えでうつろひにけり山吹の花(大宰大貳長実)

○松風の音せざりせば藤浪をなににかかれる花としらまし(良暹法師)

(二)第二夏部　（一首）

○今日もまた尋ねくらしつ時鳥いかできくべき初音なるらん（藤原節信）

(三)第四冬部　（一首）

○つながねど流れもゆかず高せ舟むすぶ氷のとけぬ限りは（三宮）

(四)第六別離部　（一首）

○朝日とも月ともわかずつかのまも君をわするゝ時しなければ（春宮大夫公実）

(五)第八恋部下　（四首）

○逢事は夢ばかりにてやみにしをさこそ見しかと人にかたるな（よみ人しらず）

○あさましや涙にうかぶ我身かなにかろくは思はざりしを（上總侍従）

○うとましや木の下かげの志水いくらの人のかげを見るら人（よみ人しらず）

○あふことは舟人よわみ漕ぐ舟のみをさかのぼるに泡こそすれ（春宮大夫公実）

（六）芽丸雑部（二首）

○過にける月日の数もしられつゝこの身を

みるもあはれなる哉（上東門院）

○うらやましく雪のかけはし立かへり二たび
のぼる道をしらばや（源行宗朝臣）

（七）第十雑部下（二首及び連歌一句と詞書）

○つみは霜露もものこらず消ぬらんながき夜
すがら悔ゆる思ひに（覚蓮法師）

○わたつ海の底のみくづと見しものをいか
でか空に月と見るらん（勝超法師）

○雨ふればきじもしとゞになりにけり
（連歌・よみ人しらず）

○連歌の詞書「瀧のをとの夜まさりけるを
ききて・よみ人しらず」

(八)第十雑部下における歌の入れ替え。

○今日もなほおしみやせまし法のためちら
す花ぞと思なさずば（珍海法師母）

の一首は宣秀本には（類従本にもあり）あるが
光広本にはない。その代りに、光広本には
「極楽を思ふといへることを
○四方の海の波にたぶよふみくづをもなる
への波にひきなもらしそ（源師俊朝臣）」
の一首がある。（他の五本も同じ）

なお連歌の部の異同についてはすでに述べた通りである。

さて以上の如き異同が両書の間に存していることはどう解してよいだろうか。思うに光広本は宣秀本を忠実に書写したとは思われない。光広本本文の内容は宣秀本よりも他の公夏、園林、岡田、押小路等一群の伝本の方により近い。従って光広本はこれらの諸本系統のどの本かにより書写していると解釈してよいのであって松田博士が光広本は宣秀本を以

て書写したと想定したことについては少ずし
もそうではなくて訂正を要するのである。む
しろ、光広本は他の五伝本の中に位置すべき
本文を有すると考えられる。

以上見て来た如く同じ二度本（初期段階）
にあつても諸伝本の間には異同あり、それば
かりでなく更に次のいわゆる精撰本の修訂段
階を踏みようやく二度本は完成に近づくので
ある。そのことにつき次に考えてみたい。

(三) 飛鳥井雅春筆本金葉和歌集

ここで考えようとする飛鳥井雅春本は、いわゆる二度本中の精撰本の一本である。二度本と称せられる諸本も極めて多く数数の多いものからゆないものなどによって分けられるのであって、井上通泰博士、岡田希雄氏、松田武夫博士ら先学によってすでに勝れた研究がなされてきた。ここでいう精撰本はその中

にあつて数の最も少ない一群の異本群である。松田博士の第三類に類別された諸本がそれである。博士のあげられた諸本をあげてみると次の通り。

(1) 前田侯爵家蔵伝二條為遠筆本。
(2) 図書寮一冊本。
(3) 吉川子爵家蔵三十一代集
(4) 吉川子爵家蔵八代集。
(5) 図書寮蔵二七冊本三十一代集
(6) 図書寮蔵三六冊本三十一代集
(7) 図書寮蔵十五冊本八代集
(8) 京大図書館蔵（小室氏寄贈本）
(9) 京大研究室蔵本
(10) 静嘉堂文庫蔵十四冊本八代集
(11) 内閣文庫一本

(12) 伝山崎宗鑑本（大島雅太郎氏蔵）
(13) 清洲文庫本
(14) 京大図書館蔵（宮内省寄贈本）
(15) 図書寮蔵桂宮本二十一代集
(16) 図書寮蔵十一冊本八代集
(17) 伝慈鎮筆本（正宗敦夫氏蔵）
(18) 伝為家筆本（正宗敦夫氏蔵）
(19) 伝為忠筆本（　〃　）
(20) 伝為明筆本（　〃　）
(21) 伝為重筆本（吉田幸一博士蔵）
(22) 伝兼好法師筆本（吉田幸一博士蔵）

この外、井上通泰博士のあげているものに

○慶長十年写本（井上博士蔵）
○原六郎氏所蔵本

岡田希雄氏のあげているもの（「金葉集攷」・（芸文）昭和十八年四月―十九年一月）には、

○柳原葉光筆本金葉和歌集

がある。

以上の多くの精撰本の中「飛鳥井雅春本」

についてはまだ誰もふれていないので筆者は

先学のこれら多くの精撰本に新しくこの写本

を追加する意味において調査の結果を報告し

その位相を決めたい。しかしその前に若干精

撰本の他本についてもふれておく。

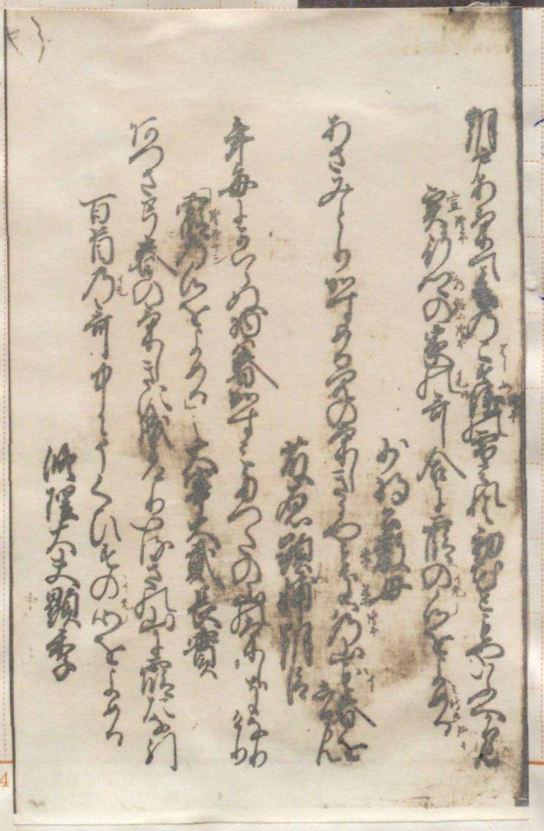
（なお、筆者の撮影し得た二度本（流布本系

・精撰本とも）の文献写真を次に貼付しておこう。）

（表紙）

「金葉和歌集」（其の一）

（静嘉堂蔵）



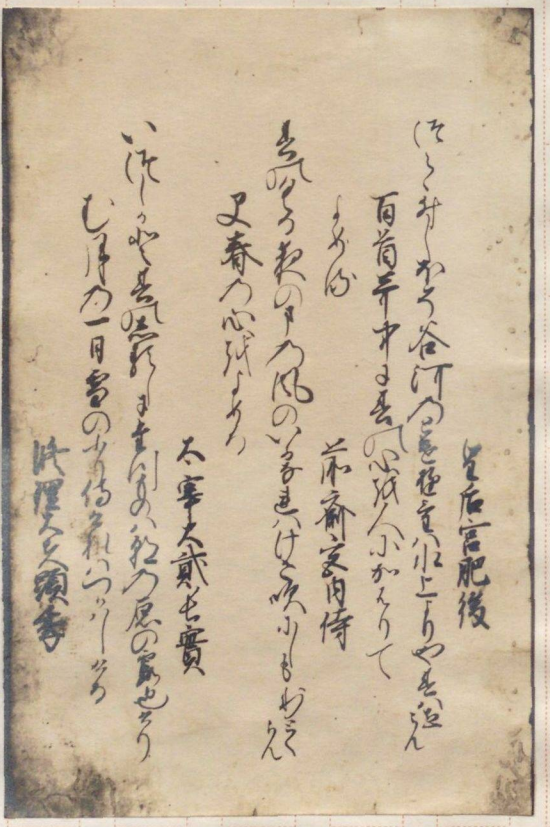
（三丁表）

（表紙）

「金葉和歌集」全（其の二）

（静嘉堂蔵）

（巻頭の丁）



金葉集（精撰本）一丁裏

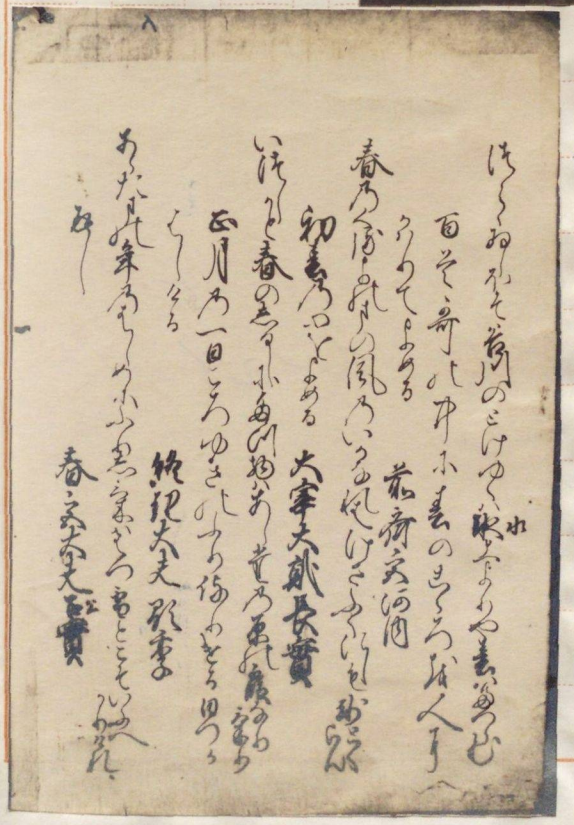
（内閣文庫蔵）

（表紙）

「金葉和歌集」全（流布本八代集版本に同じ）

内閣文庫蔵

（其の二）



（一丁裏）

「伝兼好法師筆本金葉和歌集」（精撰本）
（巻頭）（吉田幸一博士蔵）（其の一）

兼好法師

金葉和歌集第一

春部

堀河院御時百首歌たてまつりける春

従五位上大江匡房

うちなびきたちそめにけるかすみにぞ
いとゞのこりのけふはくるしき

春宮大夫公実

雪ふりつゝとしのくれぬるときくにぞ
ものゝあはれもまさりける

「伝兼好法師筆本」（奥書）

都合六百四十九首

作者二百九人　當者八十二人　前者百廿七人

天治二年四月日依　院宣撰之

撰者前木工頭源俊頼

授令手

（二の其）蔵　吉田幸一博士

以上の精撰本のうち特に注意すべきは奥書に歌員数と作者数を明記している「伝兼好法師筆本」（吉田幸一博士蔵）である。

本書は一丁十行（一丁によっては九行もある）歌は一首二行書き。上下二冊本。上冊は巻第一春部から巻第六別離部まで。下冊は巻第七恋部上から巻第十雑部下までである。金襴の帙に納められ外箱がある。表紙は上下とも梅花の模様を配し、見返には金箔を押した豪華な紙を用いている。南北朝期の珍重すべき古写

本である。上冊の墨付七十三葉。前一葉、後八葉の余白を有す。下冊の墨付七十七葉。前一葉、後四葉の余白がある。

「

萬葉集好法師

春部 上巻
うちなびき

恋部 下巻
しらざりき

全部

琴山

」

なる極札を添えている。（写真巻の一参照）

その奥書の致敬表示には

『

春部 九十五首

夏部 六十三首

秋部 百四首

冬部 五十首

賀部 二十九首

別離部 十七首

恋部上　七十一首　恋部下　九十四首

雑部上　八十八首　雑部下　四十八首

此中読人不知哥廿首　返歌六首

夢歌三首

都合六百五十九首

作者二百九人　当者八十二人　前者百廿七人

天治二年四月日依　院宣撰之

撰者前木工頭源俊頼

校合畢

この奥書の後の方の年記はすでに述べた如

く伝兼好法師筆本の如き精撰本が「天治二年四月」には完成されているという決めてがこれによつて明らかになるのである。ここに本写本の撰進に関しての資料的価値が存していると云うことが出来る。

さて、本題にたち返つて飛鳥井雅春筆本についてその本文的内容を考えるに当たつて以上の二度本書を念頭におきつゝ、或いは比較しつゝ論を進めてゆきたい。

飛鳥井本筆者雅春（永正十七(1520)―文禄三年(1594)・75才没）は新続古今撰者雅世の曾孫。豊臣秀吉の歌の師範まで勤めた名門飛鳥井家の学統を継承した貴紳である。

雅春自筆本金葉和歌集（一冊）の墨付百廿二葉。余白十葉。外箱があり、内題簽に「飛鳥井殿雅春卿金葉集」とある。室町の古写本である。一丁十行。歌は一行書き。（左に文献写真を貼付。）

金葉和歌集巻第二

夏

源師賢朝臣

藤原

雅春本金葉和歌集（夏巻頭）

（九州大学蔵）

次に、雅春本の本文を八代集抄本及び他の精撰本とを比較しつゝその特色をみてゆく。

◎巻一春（四首欠）

抄本、精撰本には皆「春部」とあるが本書は「春」の一字のみ。「部」がない。（「夏」以下同じ）

（1）年ごとに咲きそふ宿の櫻花なほゆく末の春ぞゆかしき（源雅兼朝臣）

（2）山ざくらこずゑの風のさむければ花のさかりになりぞわづらふ（左京大夫経忠）

(3) 白雲とみねには見えて桜花ちればふもとの雪とこそみれ　（右兵衛伊通）

(4) 花のみや暮れぬる春のかたみとて青葉のしたに散りのこるらむ（盛経㊐）

右のうち、(1)を除く3首のないのは精撰本各本に共通している。雅春本としては(1)をも加え四首が欠けている。従って精撰各本より一首、多いのがその特色。

なお本書のみの特色としては、さらに「春はをし人は今宵と……」の作者「内大臣」がない。

◎巻二夏（四首欠く）

(1)うの花を音なし河の波かとてわたくも折らで過ぎにけるかな

（源盛清）

(2)卯の花の青葉も見えず咲きぬれば雪と花のみかはるなりけり

（大中臣定長）

(3)いなり山たづねやみまし郭公まつにしるしのなきと思へば

（中納言実行）

(4)郭公一こゑなきて明けぬればあやなく夜のうらめしきかな

（藤原成通朝臣）

右のうち(4)は精撰本の中では本書と厚忠本

、忠明本、屐重本の四本のみにない。

なお本書の特色としては左の一首、

三井寺経蔵歌合短冊　　應禅蓮実坊

○玉くしげふたがみ山の月影のあくる程までなかぬ鶯かな

がある。また、「さ月やみ花橘のありかをば……」（中納言俊忠）の題詞を欠いでいる。続

冨精撰本より二首多いことになる。

◎巻三秋（六首欠）

(1)
藤袴はやほころびてにほはなむ秋のはつかぜ吹きたたずとも
（皇后宮美濃）

(2)
月かげのすみわたるかな天のはら雪ふきはらふ夜半のあらしに
（大納言経信）

(3)
さしこそはみやこ恋しきたびならめ鹿の音にさへぬるゝ袖かな
（源雅光）

(4)
秋ならで妻よぶ鹿を聞きしがなをりから声の身にはしむかと
（藤原行家）

(5)
今はしも穂に出でぬらむあづま路の岩田の

ヤ野のしのをすゝき（藤原伊家）

（6）川ぎりのたちこめつれば高瀬舟わけゆくさをのおとのみ聞する（藤原行家）

以上六首欠。但し本書のみ欠いでいるのは

（3）の一首で他の精撰本より一首多い。精撰本でも諸本により異同はあるが大体五首欠の公約数を持つ。（この事は以下同じ。これまでも同じ。諸本の共通欠歌という公約数的な結果にもとづくものである）この公約数の歌からはみ出した時は該写本の特質ということにな

る。なお、本書には左の如く八代集抄本と順序の異なる個所がある。次の通り。

八代集抄本	雅春本
(176) 天の川かへさの船に（越後）	176
(177) かへるさはあさ瀬もしらじ（後頼）	178
(178) 咲きそむる朝の春の（雅兼）	179
(179) 咲きにけりくちなし色の（法源縁師）	177
※（上の番号は国歌大観番号による）	

◎巻四冬（四首々）

(1) 音にだに袂をぬらす時雨かなまきの板屋の

よるのねざめに　（源定信）

(2)
風はやみとしまが崎をこぎゆけばゆふなみ千鳥たちみなくなり（神祇伯顕仲）

(3)
ことわりや交野の小野に鳴く雉子さこそは狩の人はつらけれ（内大臣家越後）

(4)
あらち山雪ふりつもる高嶺よりさえても出づる夜半の月かな（源雅光）

以上四首を欠く。この中(3)のみの欠は本書の特色。なお、(297)「衣手によごの浦風さえ〈てこだかみ山に雪降りにけり」の作者を本書

には「源俊頼朝臣」としているのは「源頼綱朝臣」の誤写である。八代集抄本の方が正しい。

◎巻五賀（一首欠）

八代集抄本には「賀歌」とあるが本書は只「賀」のみ。欠歌は左の一首のみ。

(1) 九重にひさしくにほへ八重桜のどけき春の風と知らずや（中納言実行）

巻五に於て欠歌を有する精撰本としては「厚明本」に一首（「をのづから我身さへこそ」）。他に「慈鎮筆本」には巻五の「みつぎもの運ぶよぼろを」

から以下巻七「あさましやあふせもしらぬ」まで八十四首ほど欠。これは特別な多数の欠歌で例外として、八代集抄本より一首欠脱しているのは房明本と雅春本のみである。しかもこの両本では欠脱歌はそれぞれ異なる。これは両書のみが他の精撰本と異なるものを有していることになるのである。

◎巻六別

巻六は本文全く八代集抄本と同じ。欠歌なし。但し、抄本では「別離歌」とあるのを雅春

本ではただ「別」とのみ書いている。

◎巻七（恋）（六首欠）

八代集抄本では「恋歌上」とあるが本書はただ「恋」とのみあり上のもない。本文は次の六首を欠く。

(1) わが恋はおぼろの清水いはでのみせきやる方もなくて暮しつ（としよりの朝臣）

(2) 知らせばやほのみしま江に袖ひぢて七瀬のよどに思ふ心を（神祇伯顕仲）

(3) ありふるもうき世なりけり長からぬ人の心

をいのちともがな　（相模）

(4) 白菊のかはらぬいろもたのまれず移ろはでやむ秋しなければ　（春宮大夫公実）

(5) よひのまにほのかに人をみか月のあかで入りにしかげぞ恋しき　（藤原厚忠）

(6) 吹く風にたへぬこずゑの花よりもとぐめがたきは涙なりけり　（源雅光）

この六首の欠は他の精撰と全く一致し、雅春独自の欠歌はない。ただ巻七にも一個所次の誤写がある。

(387)の「水鳥の羽風にさわぐさ

らなみのあやしきまでもぬるゝ袖かな」の作者を「源俊頼朝臣」としているのは「源師俊朝臣」の誤りで八代集抄本が正しい。

◎巻八（恋下）（八首欠）

抄本「恋歌下」が「恋下」となっている。本文は次の八首を欠く。

(1) 人しれぬ恋をしすまの浦人は泣きしほたれて過すなりけり（皇后宮権大夫師時）

(2) 山里のおもひかけひにつらゝゐてとくる心のかたげなるかな（左京大夫経忠）

(3)
ものをこそしのべばいはぬ岩代のもりにのみもるわが涙かな（源　親房）

(4)
つれづれと思ひぞ出づる見し人をあはで幾月ながめしつらむ（橘　俊宗女）

(5)
なこそてふことをば君が言ぐさを園の名ぞとも思ひけるかな（源　俊頼朝臣）

(6)
うとましや木の下陰のわすれ水いくらの人のかげを見つらむ（よみ人しらず）

(7)
つらかりしこころひに逢ひみてもなほ夢かとぞうたがはれける（源　行宗朝臣）

(8)あやしきも嬉しかりけりおとしむる其の言の葉にかゝると思へば（源俊頼朝臣）

以上八首のうち(8)を除いた七首は殆どの精撰にはない。ところで(8)を欠いでいるのは、慈鎮、兼好、厚忠、為明、為重、為遠、吉川家旧蔵廿一代集、宝鑑の各本であり、これに本写本を加えて九本となる。図書寮蔵十一冊本八代集にはその歌の右肩に、「或本無此哥」とあるところからもと（精撰本には欠脱していたと解した方がよいと思われる。

次に八代集抄本と本書との歌の配列順序に異同している個所が二つある。（読人しらずの十七首一連のところ。）

雅春本では、(A)に於ては、

(A)
(1) 足引の山のまにくたゐれたるかりきはひとりふせるなりけり
(2) みくまのに駒のつまづく青つづら君こそまろがほだしなりけれ

の順になっているが、八代集抄本では(2)は四首隔てた後に配列させている。精撰本で雅春本と同じ順序をとっているのに兼好、厚忠、厚明、厚重、厚遠、吉川、図書寮八代

集、内閣文庫、青洲文庫、三條西家旧蔵八代集各十本。精撰本で抄本と同じ順序になつているのに慈鎮、冷家、図書寮一冊本、山崎宗鑑等四本。これらのことから考えて精撰本では逆の順序をとつていたと解される。次に、

(B)
(1) あふことのかたのに今は成ぬれば思ふかりのみ行にやあるらん
(2) 近江にかありといふなるかれ井山君はこえけり人とねくさし

(B)に於ては雅春本は右の順序になつている。八代集抄本ではこの逆である。これも精撰本で雅春本と同じ順序をとつているのに慈鎮、

兼好、為忠、為明、為重、為遠、図書八代集、内閣、山崎、青州、三條西の各十本があり、精撰本で抄本と同じのに為家、図書一冊、吉川の各三本がある。これからみるとやはり精撰本では(1)↓(2)と配列していたと解した方が正しい。

◎巻九（雑上）（欠歌なし）

抄本では「雑部上」とあるが本書ではただ「雑上」とのみある。本文としてはこの巻は雅春本独自の特色がある。即ち他の精撰本に

は(1)いかでかは袂に月のやどらましひかり待ちとる涙ならずば〈平康頼母〉(2)夜な〈は まどろまでのみ有明のつきせずものを思ふ頃かな〈皇后宮美濃〉(3)すみよしのまつかひ有りて今日よりはなにはの事もしらすばかりぞ〈加茂成助〉の三首を欠いでいる諸本が多い。

雅春本ではこの三首みな有している。この点では流布本と同じ。しかしこの三首のうち(3)の歌の順序は同じであるが、(1)・(2)は最後に移動させ(1)を最後尾に配置させていることであ

る。この点では異なる。もと〈精撰本では
この二首はなかったのではあるまいか。（(3)も
公夏本のみにはあるが他は欠）(3)もなかった
とみる方が正しいのではなかろうか。それを
雅春はいずれか他の諸本で後で補充したよう
な形をとっている。ここに雅春本の特色がみ
られる。なお今一つ抄本と順序の異なる個所
がある。次の通り。

八代集抄本	雅春本
(587) うたゝねの夢なかりせば（顕季）	(590)
(588) さ夜中に思へばかなし（師頼）	(591)
(589) 家の風ふかぬ物ゆゑ（顕輔）	(587)
(590) いそなつむ入江の波の（康資女）	(588)
返し	
(591) ながゐするあまのしわざと（むすめ）	(589)

この逆な順序は慈鎮本、為家本、為忠本、為明本、為重本、兼好本の六本も雅春本と同じでおそらく精撰本の順序としてはこちらの方が本書であったであろう。

以上の如くこの巻では他の精撰本と歌数の上でかなり相違がある。即ち他本にない（精撰本）三首が全部本書には備わっていることである。この事は雅春本の特色で注意すべき大きな異同である。従ってこの巻には欠脱は一首もない。

◎巻十（雑下）（四首欠）

例の如く他本では「雑部下」とあるが本書には「部」はない。本文に於て欠げているのは次の通り。

(1) 蟲の音はこの秋しもぞなきまさる別れのとほくなる心地して

（藤原知陰）

(2) 罪はしも霧もものこらず消えぬらむ長き夜すがら悔ゆるおもひに

（覚蓉法師）

(3) わだつみの底のもくづと見しものをいかでか空の月となるらし

（勝超法師）

(4) けふも猫をしみやせまし法のためちらす花ぞと思ひなさずば

（珍海法師母）

このうち前三首は精撰本に殆ど欠けているのでもと〈精撰本にはない歌とみるべきで

ある。

(4)の欠は雅春本のみの特色。或いは書きおとしであっただろうか。なお、

○よもの海の波にたゞよふ水屑をも七重の網にひきなもらしそ（源師俊朝臣）

の一首、慈鎧本、兼好本等八本にはない。この歌を保有しているのは雅春本の外為家本、為重本、図書寮一冊本、内閣文庫一本、青洲文庫、三條西旧蔵等六本。さきの貴重な古写本八本にないのでおそらくこの一首も精撰本にない歌と解した方が正しいだろう。雅春本では

この一首の位置が抄本と異なり最後にある。

こうして雅春本が後で書き加えた形になっているのもこの歌の事情を物語るもののようである。なおこの歌の作者を八代集抄本では源、俊頼、朝臣としているのは源、師、俊、朝臣の誤りであり雅春本の方が正しい。その外歌の順序が八代集抄本と異同ありその個所を示すと次の通り。この順序も雅春本特有のものである。

八代集抄本	雅春本
(668) いさぎよき空のけしきを（行尊）	(668)
(669) いかにせんうき世の中に（行宗）	(670)
(670) 心にはいとひはてつと（静厳）	(671)
(671) あみだ仏ととなふる声に（選子内親王）	(669)
(672) をしへおきて入にし月の（肥後）	(672)

連歌の部

次は連歌の部であるが、他の精撰本兼好本以下多くの諸本には、

○花くきはちるてふ事ぞなかりける（読人しらず）

○風のまに〈うてばなりけり

（前太政大臣家ノゆりはな）

の二句を欠いでいるが雅春本にはある。但しこの二句の位置は妙本と異同あり、最尾にある。これも雅春が他の本から写したものかこうした追加の形をとっている。これも、もと〈精撰本としてはなかったのが正しいのではあるまいか。連歌は同じ精撰本にあってもかなり異同が激しいのが特色である。従ってその順序も諸本によって異なるが雅春本に於ては次の如く妙本との相違がある。次にそ

の個所を示す。

八代集抄本	雅春本
(706)○雨ふればきじもしとゞになりにけり　（よみ人しらず） ○かさゝぎならばかゝらましやは	(708)
(707)○梅の花笠きたる蓑むし　（慶運） ○雨よりは風ふくなとや思ふらん（わらは）	(706)
(708)○あらふとみれどくろきとりかな　（頼算） ○さもこそはすみの江なるめよとりもに（よみ人しらず）	(707)
(709)○よろおとすなり瀧のしらいと　（よみ人しらず） ○くりかへしひるもわくとはみやれども	(709)
(710)○奥なるをもやはらとはいふ　（成光） ○見わたせば内にもとさばたてけり　（覲運）	(710)
(711)なゝそぢにみちぬる潮の浜びさし 久しくよにも堪れぬるかな　（俊頼の歌一首）	(711)
なし	(704)○花くきは ○風のまに〳〵　の連歌最後に配置

以上をまとめて雅春本と他の精撰本の最大公約数の欠歌とを比較して一覧表を作ると次のようになる。

巻	精撰本	雅春本	雅春本の増減
一	三首	四首	一首多い。
二	三首	四首（但し、別に一首「玉くしげ」の新補入歌あり）	一首多い
三	五首	六首	一首多い
四	三首	四首	一首多い
五	欠歌なし	一首	一首多い
七	六首	六首	同じ

八	八首	八首	同じ
九	三首	欠歌なし	三首少ない
十	四首	四首（但し、歌は異なる）	同じ
欠歌数	35首	37首	2首増

以上の如く雑春歌の方に二首欠歌が多い結果になる。（但し、精撰歌に全くない「玉くしげ」（二巻）の歌一首を雑春歌が保有しているのを考え合わせるとこの二巻は増減なく総計としては一首増ということになる。）「玉くしげ」を雑春歌に新しく書き加えたのはどういう意

味があるだろうか。八代集抄をみるとこの歌の前に(161)「玉くしげふたかみ山の木の間よりいづればあくる夏のよの月」（源親房）の一首（一、三句全く同じ）がある。歌の順序配列についてはかなり慎重だった後鳥羽にしてみれば(161)は夏のあけ方の情景（詞書にはただ「夏月の心をよめる」とある）でつぶいての本歌も同じくあけ方の月で（詞書には「三井寺経蔵歌合短月」とある）ある。ただ歌合から採用した歌になっている。

その次は(162)「みな月のてる日の影はさしなが

ら風のみ秋のけしきなるかな」（摂政左大臣）
につづく。これは昼の情景。さらに(163)は「夏の
夜の月まつほどのてすさびに岩もる清水いく
むすびしつ」（基俊）の夜の情景に展開する。
そして最後は「みそぎするみぎはに……」（顕隆）
の歌となり夏の歌は終りとなる。こうした時
の推移を俊頼は考えて編集している。雅春本
に応禅遵実坊の歌を持っていることは俊頼の
編集途上にこの一首を保有する一本があった
のではないか。しかし、考えてみれば重なり

すぎている嫌いはある。三春歌にもこの応禅の歌は削除されているし、すでに述べた通り精撰本にはない歌である。雑春が欠歌をわざ〳〵設って補入したとも思われない。重なりすぎる嫌いはあっても俊頼が一時この歌を採用していたと考えられる。或いは応禅と何か関係あったものか。この点定かでない。要するに雑春歌にこの歌の保有していることは大きな特色とみるべきである。

次に雑春歌独自の欠歌は「年ごとに」（巻二）

「さもこそは」（巻三）、「ことわりや」（巻四）、「九重に」（巻五）、「けふも猶」（巻十）の五首である。

この五首は八代集抄本、精撰本にはもとより漸減の方向にあった三奏本にも保有する歌であることから考えて雅春本の書き落しであろう。

以上の本文を有する雅春本の祖本はいかなる本であろうか。その伝来について若干考えてみよう。その一つの手がかりになるのは図書寮蔵十一冊本八代集の奥書である。

それには次のようにある。

「本云
此集依陶尾張守多々良興房所望、令書写
被他本遂校合彼是、可謂證本者也
永正十一年十月上旬　従二位雅俊　在判

右一冊者、以曩祖雅俊卿自筆之本令書写
者也。件本修頓阿法師所持之本被加校合
云々。　可秘々々　亜槐藤判」

この奥書によつて明らかになることは、永
正十一年(1514)(室町期)に飛鳥井雅俊が頓阿の本と

校合して金葉集を書写したという事実である。

雅俊は雅春の祖父に当たる歌人で武將大内義興とは最も親交があった。（ここにいう陶尾張守多々良興房とあるのも大内家一門である。）

雅春書写も雅俊相伝の飛鳥井家伝来本であったに違いない。頓阿が金葉集を書写せしめていることは、柳泉本の奥書により知り得る。柳泉本の奥書は六つの部分から成っており、岡田希雄氏は一号から六号までの番号を附して区別された。（前述の「芸文」誌上）その三号に

「写本云、又云
此集両三本所持皆以荒凉之間尋證本誂
立仁大德（新千載集隠名作者）書写畢。西方行者頓阿。」
とあるのがそれである。これと殆ど同じ奥書
が次の諸本（精撰本）にもある。

(1) 吉川家旧蔵八代集本の奥書

(A) 永安五年五月九日一校畢。又以後頼自
筆本重校正之畢。

(B) 此集両三本所持、皆以相違、仍校合之
本或人異之本有之、今尋證本書写之畢
西方行者頓阿　在判

(2) 図書寮蔵十一冊本八代集の奥に

「校本云

此集両三本所持、皆以荒凉之間、尋證本訖

新千載隠名作者

立仁大徳書写訖

西方行者頓阿

相違之處以朱付了」

(1)の(B)では頓阿自身が書写した事になっている。(2)は柳原本三号と殆ど一致するのが多少異なる。これによると頓阿が立仁大徳に書写せしめたことは疑いない。さすれば雅春本の伝流は一応、

俊頼自筆本校合 ↓ 頓阿校合 ↓ 雅俊校合 ↓ 雅

春本という系統に依っていることが考えられる。（この事については後述する。）

ところで柳原本の奥書をみると、複雑な書写過程を辿っていることがわかる。岡田希雄氏の番号を以て示すと、

（一号）承安五年五月九日自書写畢校了　　写本云 本云

同校或本了

以後頼自筆本重校了　　同年五月十二日　堀河院百首歌校合了

以大進殿本校了朱筆彼本勘物也

木工歌校散木集了付件説歌以別紙書

入了此等如本

（二号）

安元々年八月廿二日自筆書写了此本皇

后宮亮本也

小納言（ママ）顕｜御判

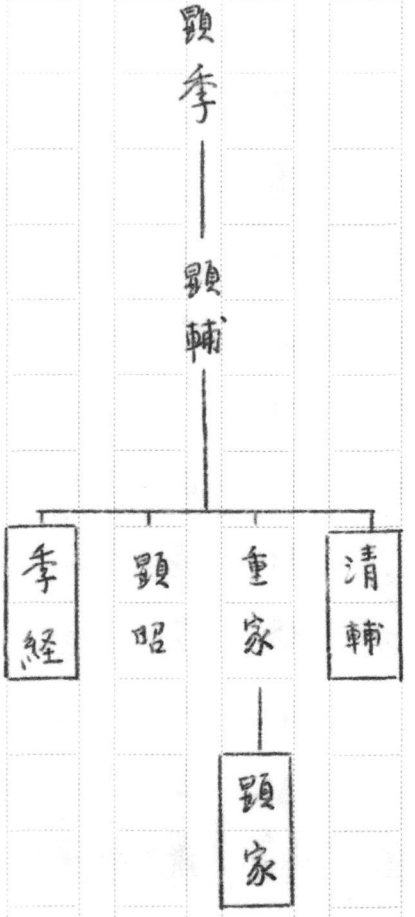
一校了

とあるが、すで松田武夫博士の指摘している通り、この「一号」、「二号」はもと〈同一写本に書かれた奥書であるから岡田氏の如くに分けなくてもよいわけで松田博士の所説に従いたい。（「金葉集の研究」P.261）岡田氏は書写を段階的に考えてかく分けたものであろう。その

意味では首肯出来る。

この奥書にいう大進殿とは清輔のことで、皇后宮亮とは季経、顕―とは顕家。いずれもいわゆる六條家の家学を継承した歌人である。

（畧系）



顕家は安元々年（1175）（承安五年は七月廿八日安元と改元）八月廿

二日に季経本を書写しているのである。

その季経本は承安五年五月九日に書写されていることが「此本皇后宮亮本也」という二号の奥書によつて判明する。というのは承安五年季経が皇后宮（育子）亮になつていることが彼の出席した庚申社歌合、玉葉などにより明らかにされているからで、季経の書写過程は一号の奥書にみるようになかなか入念なものであつた。それによると季経は自ら書写し終つて校合を検討し、さらに「同校或本了」と

あるように他本とも校合している。これはいかなる本であるか不明。さらに「以後頼自筆本重校了」とあるところからすると後頼自筆本を見た書きぶりである。しかし一方吉川本の奥書によると「又以後頼自筆本重校正之畢」とよく似た書き方ではあるが「又」を用いている。松田博士はこの事を中心にとりあげ、孝経の依った親本は後頼自筆本ではなかったと推論されている。後頼自筆本が得られるほどなら自筆本そのものを何故に書写しな

かつたかという疑問の生ずることも首肯出来るところである。こういうことから季経の依つたのは父顕輔の本ではなかつたかと推測されている。むろん、博士自身も言われている如く顕輔本の存在には何ら明徴はないが、詞花集撰者にまでなつた歌人ではあり、かたが た後鳥の重要視していた人で優秀な二度本の精撰本を所有していたことは考えられるという構想に立つての推論であつた。

とはあれ歌学を誇る六條家に二度本の精撰

本の系も最も信頼すべきものの伝来されていたことは容易に考えられるところである。

六條家の伝来は以上によつて判明するが、柳原本の三号の奥書は先にも一寸ふれた頓阿の奥書である。一号、二号の奥書は六條家を中心とする二度精撰本のことであつたが、この三号に於て二條家系統に属する頓阿の奥書を有することは精撰本はただ六條家のみでなく二條家にも伝来していることの証にもなり、飛鳥井雅俊が頓阿所持本を以て校合したことも（図

書寮蔵ナ一冊本八代集の奥書による）まさしく二條家伝来の系譜を物語るものである。

従って柳原本における一号、二号の奥書は六條家を中心とする写本過程のことに属しており、この事とは全く切離して考える必要がある。傾阿は古今集についてはしばしば書写しているが金葉集を書写していることは特筆すべきことであろう。柳原本奥書三号に

「此集両三本所持皆以荒凉之間尋證本」

と言っている所をみると傾阿の所持していた

写本は善本でなかったらしい。そこで證本を求め立仁大德に書写させたのである。その證本が何であったかについては一言もふれていない。当時流布されていた本であろうからやはり精撰本であったことは推測される。若し二條家関係としたならば「伝兼好法師本」も すでにあったろう。頓阿は特に兼好とは親交を持っていた。その他「伝為家本」「伝為忠本」「伝為明本」、あるいは「葛鎮本」などが鎌倉・室町期の書写本等考えられるが、これは推

測の域にすぎぬ。雅春本が何によつたかについても雅春自身何も語つていない。しかし、飛鳥井家伝来ということはまず考えられるところであり、そうかと言つて鎌阿本の系統にあつても諸本の校合などを経て雅俊本が鎌阿本そのまゝのものとは考えられず、（より、）全様に雅春本が雅俊本と一致していることも考えられない。柳原本自体についても六條家、二條家両方の奥書が混在しているのでその本文も系統の上からはわけられない。ただ二度本の精

撰本であることだけは確認出来るのである。

試みに筆者は、柳原本と雅春本とを比較して雅春本独自の本文と柳原本との間に関係をみようとした。しかしその間には何らの関係をみつけおさなかったのである。（例えば、春の歌に雅春本では「年ごとに咲きそふ宿の」の歌が他の精撰本より一首多く欠けている。柳原本には他の精撰本と同じく保有しているなどのこと）ただひとつ注意することがあった。それは、雅春本のみにある巻二夏の「玉くしげ

ふたがみ山の月影のあくる程までなかぬ鶯かな」（応禅蓮実坊）についての書入れのある事である。その個所は「玉くしげふたがみ山の木の間よりいづればあくる夏のよの月」（源親房）の歌の所で「三井寺経蔵歌合云題月慶禅蓮宗房也タマタレケフタカミ山ノ月カケノアクルホトマテナカメツルカナ何先読哉不審」（本のママ）とある。（タマタレケはタマクレゲの誤り）ここで問題にしているのは(一)この二首がよく似ていること。(二)詠まれた時期の先後のこと。の二つ

である。

柳原本に僅かながらこの歌についてふれていることは雅春本の本文調査の側からすれば大切なことで、柳原本においてこの歌を採りあげ書きこんでいるのは似ていることの問題でもあるが、ただそれだけではなくこの歌の保有している本があったのではないかという問題につながる。それは次にあげている歌の詠まれた時期の先後の問題だけのものでもない。本文批評のことと関係する。

この外に雅春本のみの特色としては、

(一) 雅春本独自の欠脱の歌……五首

(二) 雅春本のみにある歌……三首

が指摘される。歌量に於ては先に表示した如く僅か一首欠脱歌が多いという結果を得たが、一首という些細な数の問題ではなく本文批評としての本質的な問題を含んでいる。欠脱歌をひい「書き落し」という写本過程における誤謬として簡単に片づけるのは容易であるが、それのみでは解決を与えるものにはなるまい。勿論雅春本には明らかに脱字と思われる歌

がある。

それを示すと次の通り。

(1) 恋すてふ名をだに流せなみだ川つ[れ]なき人も聞きやたたると（第七恋上・よみ人しらず）

脱

(2) 後の世と契りし人もなきものを死なばやとの[み]言ふぞはかなき（全・藤原成通朝臣）

脱

(3) 我恋の思ふばかりの色にいでばいはでも人にみ[え]ましものを（第八恋下・左兵衛督実能）

脱

(4) 名きくよりかねて心移る心なないかにしてか[は]逢おべかるらむ（全・源縁法師）

脱

(5)
年ふれば我がいただきにおく霜を草の上と 脱
も思ひけるかな
（才九雑上・藤原仲実朝臣）

(6)
家の歌合に廬橘をよめる
（この題詞脱落）
さつきやみ花橘のありかをば風のつてにぞ
空にしりける
（才二夏・中納言俊忠）

(7)
三月尽によする恋といへることをよめる
内大臣 脱
春はをし人は今宵とたのむればおもひわづ
らふ今日のくれかな

以上五首・題詞一個所・作者名一人の欠脱
は雅春本の不備な点である。しかしこれらは

いわゆる欠脱、脱字で本文上の本質的問題とはおのづから異なるものである。

さて以上いろ〳〵と雅春本の内容について考えて来た。同じ精撰本とも異なった所があり、八代集抄本との校異は筆者の調査では189（歌に於て）首（かなづかいの相違も含む）。題詞に於ては更に多く451ケ所（細かく分析すればもう少し多くなる）。作者に於て25人の相違をみいだす。

八代集抄本と多くの異同のあるのは当然であるが、精撰本の間にあつても公夏本程には

ないにしてもやや異本的位置にある。精撰本中にあって二（同じ）條家系統本に於ても雅春本にはそれ自体としての特色を保有していたということになる。これまでの学界に於て雅春本については余りふれたものもないので以上筆者の調査したことを一応報告した次第である。

以上二度本の新しい資料として「伝中御門宣秀本金葉集」と「飛鳥井雅春本金葉集」を中心にその他関係諸本との本文比較を試みて

きた。同じ二度本と云つても群書類従本と精撰本との間にはかなりの異同がある。また精撰本相互にあつてもかなりの相違があるという風に本文上金葉集は極めて複雑な様相を呈している。のである。

さて精撰本の中で最もその代表的内容を有するのは「伝兼好法師筆本」（吉田幸一博士蔵）と云える。南北朝の古写本という古い書写年代であること。完本であること。確かな奥書を有すること。等の條件を満たしている

ことがその理由である。その奥書にはすでに述べた通り「天治二年四月日依院宣撰之」とある。これによって二度本中の精撰本がこの時まですでに完成され奏覧に供されたという有力な資料になり得るのである。

従って初度本の成立したのを天治元年十二月廿日以后として、その初度本が返却され新しく修正改訂して精撰本の完成まで約四ケ月を要していることになる。この二度本も遂に嘉納されるところとならず、後頼は却下され

た二度本の再考をせねばならなかった。

二度本の巻頭歌は象知の通り、

○うちなびき春はきにけり山川のいはまの氷

今日やとくらん（修理大夫顕季）

の歌である。白河院はこの巻頭歌がお気に

召さなかったらしい。

後頼としては初度本の却下された経験をすでに持っていたし、今また苦労改修に当たったこの四ケ月が徒労に終ったわけだが、却下されたに以上は再びこの改訂に当たり白河院にお

答えせねばならなかつた。この四ヶ月の後頼の編集も大変なものであつた。同じ二度本修正の過程を考えてみても少なくとも次の様な段階を通つている。

(1)続類従本の形態に改修

↓

(2)伝経元筆本の本文に修正

↓

(3)八代集抄本(流布本)の本文訂正

↓

(4)伝兼好法師本(精撰本グループ)の如き最終的本文校訂

このような過程を辿ること自体他の勅撰集撰述には全く見られない大きな作業であつた。

天治二年といえば俊頼すでに71才の高齢を迎えていた。高齢の俊頼にしてみれば重なる改修は決して容易なわざではなかったであろう。しかし、ともかくもう一度三奏本の作成に当たらねばならなかった。

第四節　三奏本撰進考

(一)　伝本考

三奏本の伝来について語っている文献は極めて乏しい。その中にあって袋草紙と八雲御抄にこの伝来のことを語っている個所がある。

まず袋草紙をみると、

「……第三度之度以中書之草案先覧之。而件本無左右納畢。仍撰者許無此本云々。件本在故待賢門院。而今前大相国申出書写

之。無餘所云々。件本兼盛能宣歌并玄々集、拾遺集歌等入之。」

これによると、

(1) 三奏本は草稿のまゝ献上して白河法皇は嘉納され給い撰者の手許には此本はない。

(2) 法皇御寵愛の待賢門院璋子の許へ遣られ、門院薨去後、実兄藤原実行（前大相国）が申し出てこれを書写。それ以外には伝本はない。

(3) 三奏本には玄々集、拾遺集の歌が入

集している。

というのである。ことに(3)は後に述べる本文の内容と大いに関係をもつ。

「八雲御抄」にも大体同じことを書いているが、さらに「……而自待賢門院実行下給て披見之間、甚外本不留。甚本は焼燬。」とあり、実行借覧三奏本などは焼失しているのではないだろうかと袋草紙にないことまでも書きかえている。

以上両書の記事により三奏本の伝本は乏しかったようである。しかしその後昭和五年に

松田武夫博士が「伝後京極摂政良経等三奏本金葉集を発見され、昭和十三年六月これを岩波文庫「三奏本金葉和歌集」として校訂上梓されたことは金葉集研究の上に新しい分野を開拓した。次に数少ない三奏本現存本を挙げると次の通り。

(1) 伝後京極摂政良経等本（平瀬陸氏蔵）一帖

(2) 東京大学附属図書館蔵本（南葵文庫旧蔵）（一冊）（(1)の影写本）

(3) 松田直兄本（松田武夫博士蔵）（二冊）

（天保九年板・良経筆本の模刻本）

(4) 草場茂一氏蔵本（一冊）

（嘉永四年十月廿五日松尾老隠書写。良経本或いは模刻本の写本）

(5) 二条為遠筆本（吉田幸一博士蔵）（一帖）

（横田袋翁旧蔵本）

(6) 続群書類従所収本（第三六六）

以上の六本についての系統は吉田幸一博士が委細に説明され、(2)(3)(4)の三本は(1)により、(5)(6)は(1)以外の三奏本から転写したことを報

告されている。（「東洋大学紀要（第六輯・昭和二十九年三月三十一日）

吉田博士が二條為遠筆本を新しく学界に紹介発表されたことは良経筆本の欠を補う意味からもまた他本との校合のあともみられ、さらには三条本に除かれた歌が全巻にわたって片仮名を以てその上欄に書き込まれていると いった誠に貴重な南北朝の古写本というべきで金葉集研究史上に大きな意義をもたらしたものであった。筆者も同博士の三条本及び兼好筆二度本等の借覧を得マイクロフイルムに

撮影させて頂いて学恩を蒙った。

この三奏本為遠筆本についてはすでに博士自身くわしく「東洋大学紀要第六輯」に発表されているのでこと新しく筆者の加えるところもないが、一応同博士の論文をたよりにその本文内容をさぐり私見を加えておこう。